
ポケモン不思議のダンジョン【日常を変えた救助隊】

スイッケン星砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン【日常を変えた救助隊】

【Nコード】

N8488S

【作者名】

スイツクン星砂

【あらすじ】

毎日の繰り返し返し日常に飽きてしまった女の子。「たまには非日常や刺激を味わってみたい」その願いが叶ったのか彼女はポケモンの世界へとスリップしていった。しかも目が覚めたら。果。たして彼女は試練と言う壁を乗り越えられるのか…!?

変わらない日常（前書き）

ついに始動！

一回一回の書いてみたかったです（笑）

変わらない日常

つまらない

毎日毎日同じ事の繰り返し

うちはこんな日常に飽き飽きしていたよ

そしてうちはずっとこんな飽き飽きした日常が続くと思っていた

いつもと同じように起き

いつもと同じように学校に行く

いつもと同じように授業を受け

いつもと同じように帰って

いつもと同じように寝る

とても退屈だった。非日常や刺激を求める時だってあった、
そんな平和でなんの変鉄もない日常がずっと続くのかと思ったこと
もあった

たまにはうちのお陰で世界が救われたとかそういう経験をやってみ
たい

例えば…ポケモン不思議な…ダンジョンだったっけ？

一度はゲームの主人公になりたいorゲームの世界に入ってみたい

って誰もが思ったことあると思うんだ

え？無い人も居るって？……まあそう考える人と考えない人それぞれじゃん（汗）

とにかく！～うちは……うちは

「こんな日常あきたあああああ……！！！！！！」

その時うちは意識を失った

変わらない日常（後書き）

「うちはこれからどーなるの

！？」

まあ落ち着きなはれ

次回辺りから分かってくるわ

「マジかいな」

ポケモンになった少女(前書き)

グダグダかも(笑)

今回で主人公の名前が分かります(o^_^)(b

ポケモンになった少女

ズッシン！！！！

うち

「のわ！じ…地震や！！」

ゴゴゴゴと震える音を出しながら大地が揺れ、さらには落石や地割れなど誰もが何とも出来ない自然災害が発生していた

9

「わああああっ助けて~~~~っ！！！！」

突然聞こえた助けを呼ぶ声、先程の大地震で落石に埋もれたであろう。さすがにうちはほったらかしにするわけにもいかない

邪魔な落石をサッサとどけていくうち、

うち

「ねえ、大丈夫!？」

咄嗟に叫んだうち

「は、はい!」

「なら良かったっ」

やがて砂煙が無くなり返事が返ってきた来たことにうちは安心したが…

helpを求めていた主を見てうちは絶句した…だって頭に鶏冠み
たいなのがありホッペにはオレンジ色のギザギザ、そして可愛いら
しい鰓えらをフリフリと振っている。そうぬまっおポケモンのミスゴロ
ウであったからである

うち

「そっか!！」

何かをひらめいたのか、うちは近くにあった木に

うち

「こりゃ夢だ、目覚めりゃ元に戻るハズー!！」

ゴスゴスと頭を木に叩きつけまくる

さすがに頭を何回も叩きつけまくると

うち

「いっつたあああい!！」

「じつなりませす

ミズゴロウ

「…(このポケモン…頭ラリってるのかな…?)」

ミズゴロウはこの行為について気まずく思っていた

うち

「(こゝこりゃ夢じゃない…現実だ!!!た、確か繰り返す日常に飽き飽きして叫んでそれで…あり!?!それからどうだった?!え…とえ〜と。」

ひたすら悩むうち

ミズゴロウ

「君変わってるね〜。この辺じゃ見かけないけど、名前は?名前は何て言っの?」

悩むうちにミズゴロウは本当に不思議そうに見つめて話した

ふたば（双葉）

「な…名前…？ええ」と…！双葉！！そう双葉だよ！」

ミズゴロウ

「ふたば……。名前まで変わってるね〜！！僕ミズナ！」

ふたば

「人間では普通の名前だよ（てかミズナって…そっちの方が変わってるよ）」

ミズナ

「アハハハ！人間だってー！」

ふたば

「人間だってばー！気がいたらピカチュウになったのー！」

はあとため息をつくふたば

ふたば

(一体何がなんだか分からないけど…一つはつきりしてんのは…。)

うち、ピカチュウ!!!)

ポケモンになった少女(後書き)

ふたば

「うち変な名前かな？みんなから珍しい名前やねって言われるけど」(汗)「

ミズナ

「ふたばの名前もふたばの行為も変だよ」

ふたば

「じいちゃんわー」

救助隊（前書き）

やっと書けた…

双葉

「おそーい！！のキック！」

あべし！！

救助隊

双葉

「うちほんまにピカチュウになってるやな〜…ピカチュウの毛の触り心地ってこんなやったんや」

改めて自分の驚きの姿を見て実感する双葉。それに自分にも関わらず耳や尻尾、さらに背まで所々触っている

ミズナ

「…ほんとに変わってるポケモ…いや人間なんだね双葉って（笑）」

双葉

「あたりやんでい！」

双葉はあの江〇っ子の掛け声を発した

ミズナ

「えっ！？そこ自分で認めるとこ〜！？」

ミズナは双葉にツッコミを入れた

双葉

「ナイスツッコミ！…ていうかここはどこなん？？」

双葉はミズナにここは何処なのか訪ねる

ミズナ

「ここ？ここは小さな森って言うところなんだよ。緑豊かな森で、草ポケモンがよく見当たるよ！！それで…」

双葉

「ふーん小さな森ね、何だか地味な名前。もうちょっといいネーミングつけてあげようよ」

双葉はこの森の良いところを話していたミズナを無視して双葉はネーミングのことについて、物足りなさそうな目でミズナを見る

ミズナ

「……………僕が小さな森って言う名前を付けたわけじゃないんだけど………
…ていうかそっち!？」

普通なら今の自分の居場所を知り、今やるべきことを考えるはずだが双葉はお構い無しに答えたのに対しミズナは啞然としていた

そんな二人に…

?

「きゃあああああ!！」

突然誰かの悲鳴が

ミズナ

「なっ…今ひひひひひ悲鳴がした…!!！」

突然の悲鳴に腰が抜けたミズナ

双葉

「あつちからだ！」

双葉はミズナを引っ張りながらダッシュで悲鳴が聞こえた方向に向かった

ミズナ

「まだ心の準備がああああ〜！！！」

ミズナの声はあっけなく木霊と化したのであった

…

双葉

「だ…大丈夫!？」

双葉が声を懸けた相手、それは薄っぺらい4枚の羽があり、まるでモンシロチョウとアゲハチョウを足したようなポケモン、バタフリーだった

バタフリー

「だ…大丈夫よ私は…もしかして、あなたたち救助隊なの!？」

バタフリーは救助隊を求めていたらしく、バタバタと羽を騒がしながら問う

ミズナ

「い、一応です…」

小声で答えたミズナ

双葉

「それよりどないしたん？」

双葉はバタフリーに問う

バタフリー

「た、大変なの！私の…私の大事な子供が…地割れの中に落っこちたのよ！！」

ミズナ

「え…ええ！？地割れの中にだつて！？」

ミズナと双葉は目が飛び出しそうなくらい物凄く驚く

双葉

「さっきの…地震で地割れが出来たんやね…これは助けにいかんと！！その蝶々さんうちらがその子供を助けます！だから安心しいなさい！」

双葉は大声でバタフリーに告げ、またまた猛ダッシュで事件現場へと走っていった。

ミズナ

「えっえっえっ！？…双葉…行っちゃったよ………やっ
ぱ僕も行く~~~~~~~~！！」

ミズナも双葉を追いかけて走っていった

バタフリー

「お…お願いしますね…」

…

in地割れ付近

ミズナ

「はあ…はあ…やっと…追い付いたよ…はあ…」

既に息切れをしていたミズナに双葉はそれに気にせず地割れの中を
ずっと見ていた

双葉

「…これはかなりの深さがあるわね…まあ大丈夫か、行くよミズナ
！」

ミズナ

「えっえっ！？双葉本気なの！？こんな深い穴に入るの！？」

ミズナはおどおどしていた

双葉

「入らなかつたら誰が入るんよ？今ここにはうちとミズナしかい
ないんよ！だから行くったい！！」

ミズナ

「で…でも…」

それでもミズナは入るのが怖いのか体を振るい、今にも泣きそうな顔をしていた

双葉

「あんた…救助隊なんやろ！？救助隊は困った人を助けたりする立派な仕事や！なのにあんたはその救助隊という誇りを汚すっていうん！？」

双葉はミズナに向かって怒鳴った

ミズナ

「…だって…怖いものは怖いんだもん…。それに…僕は弱いし一度も救助に成功したことも無いし…もう救助隊なんて辞めようかな…」

ミズナは弱々しい声で自分の情けなさを語った。語った直後パチンと頬を叩いたような音が響いた。なぜならば双葉がミズナをしばいたからであった

双葉

「あんだねえ…いい加減にしいや！！救助隊でそんなごちゃごちゃ弱音吐くんやったら救助隊辞めえ！！キツイ言い方もしれんけど、あんだみたいな弱音吐いとる救助隊は辞めた方がマシ。もし辞めたくないなら、あんたは何故何のために救助隊に入ったかもう一度考え！！それが考えられないなら辞めえ！！とにかくうちは…うちは助けに行くから！！」

そう言った双葉は地割れの中へと飛び込んでいった

ミズナ

「……………僕は……………困っている人を助けたい。それで救助隊に入っ
た……………でもいつも失敗ばかりでもう辞めようかと考えたよ……………
……………でも双葉の言葉で僕は……………僕は……………困っている人を助けたい！
！決めた！！僕は行く！！」

双葉の言葉で目が覚めたミズナは覚悟を決め

ミズナ

「1…2の…3…！！うりゃああああああああああああああああ

救助隊（後書き）

今日帰ったの8時42分…

春季も近いことだし

練習もきつくなる

災害と困難（前書き）

やっと…書けたよ

長かった…

災害と困難

in地割れの中

双葉とミズナは地割れの中にいた

ミズナ

「ふ…双葉…」

ミズナは怖いのか双葉に寄り添い、ピッタリとくっついていた

双葉

「んもー！そんなに引っ付いてると歩みにくいじゃん…！」

双葉は無理矢理とミズナを引き剥がす

と、そのとき

“ズ…ズズ…ズズウン”

突如大きな地震が洞窟内を響き渡る。天井から砂煙や、小さな石ま
で落ちる

ミズナ

「あわわわまた地震だ〜〜!!」

またもやミズナは震えていた

“ゴゴ…ゴゴ…ゴゴ…”

ようやく地震はおさまったが、双葉たちはまた地震が起きる
かもしれないと、今度こそ地震が来たらこの洞窟内は崩れるという
不安を徐々に感じていた

ミズナ

「だ…大丈夫かな？」

双葉

「とにかく急ごう！」

双葉たちはダッシュで奥地へと走っていった

もちろん余震は続いている。だが双葉たちは不安を抱えながらも、助けたいという気持ちが一歩である。だから怯まないのだ

すると走りながらもミズナは最近身近なことを話始めた

ミズナ

「最近この辺で自然災害が多いんだよね…」

双葉

「自然災害？」

ミズナ

「うん、特に今みたいな地震は毎日のように起きているんだ…それ

に大竜巻で村が無くなっちゃったこともあるって…」

ミズナは改めて今まであったことを振り替える

双葉

「竜巻ね〜…うち竜巻なんか見たことないや〜…（あっち（現実世界）ではろくに竜巻なんか起きないし…これはこれでポケモンの世界は大変なんだね〜）」

竜巻のことに深く考える双葉であった

ミズナ

「（…考えたら怖くなってきた。早く帰りたいよ〜！）」

早く帰りたい、そう思っているミズナ

と、そのとき岩影から黄色い体をし、頭には二葉があるポケモン【ヒマナツツ】がヒョコリと出てきた。しかも一匹ではない、ゾロゾロと2匹いや5匹と約8匹ヒマナツツ達が出てきたのであった

ミズナ

「ヒマナツツ！もしかや君たちが助けを呼んでたの？」

ヒマナツツ

「……………」

ミズナの問いには何事も無かったかのような反応を見せるヒマナツツ達

複数のヒマナツツ達はただ双葉とミズナを見ているだけである。

そう、邪魔者みたいに

しかしミズナと双葉は気付かない、ヒマナツツ達が恐ろしい顔、いや邪悪な顔で睨み付けていることを

双葉

「違うみたいよミズツ……」

双葉は言葉を途中でやめた。なぜならヒマナツツたちは、ミズナに襲い掛かっているからである

双葉

「 危ない!!! 」

ミズナ

「 え!?! 」

そのとき双葉は頬の赤い部分からパリパリと電気が発生した。そして

双葉

「 電気ショック!!!!! 」

少し弱めな電気が複数のヒマナッツ達を襲う。だが電気は草に効果がいまひとつなので余り効いてはいなかったが、麻痺だけさせたのは確かだ

当然麻痺をしているヒマナッツたちは動けない

双葉

「 たたきつける!!! 」

動けない複数のヒマナッツ達に追い討ちをかけた双葉

当然ヒマナッツ達はKOだ

双葉

「大丈夫ミズナ？」

ミズナ

「う、うんありがとう？」

突然の出来事に震え上がるミズナ

とりあえずミズナ達は奥に進むことに

ミズナ

「おかしいよ…大人しいはずのポケモンが襲ってくるなんて……。どうしたんだろ？なにかイヤなこと起きなきゃいいけどな…」

嫌な予感を察知したミズナ

すると、突然

ポツポ

「ピイイイイイ!!」

ケムツソ

「ムウウウウウ!!」

タマタマ

「タマタマアアア!!」

そこから体は茶色と白色で小さな^{クチバシ}嘴がついていることりポケモン【ポツポ】

さらに体がゲジゲジで可愛い目をしているポケモン【ケムツソ】

さらにさらに薄ピンク色のたまごが6個あるが顔がついているポケモン【タマタマ】

この3匹が双葉とミズナに襲い掛かってきた

ミズナ

「ひえ~~~~~!!」

ミズナは声をあげながら直ぐ様逃げる

双葉

「へん！うちに傷ひとついれるなんてあんたらに出来んのかいね！
！傷ひとつつけられたいならやってみい！！」

3匹も襲い掛かっているのに余裕たつぷりの顔を見せる双葉は挑発
をかけた。すると

ケムツン

「ブウウウウウ！！」

タマタマ

「葉っぱカッター！！」

ポツポ

「かぜおこし！！」

3匹は挑発に怒りを任せ、ケムツソは糸をはく、ポツポはかせおこし、タマタマさ葉っぱカッターを同時に技を繰り出し双葉に一斉攻撃をした

双葉

「軽いね…でんげきは…！」

双葉はでんげきはという電気の波動を繰り出し、一斉攻撃された技は一瞬にして瞬殺し電気の波動は消えず、そのまま3匹に向かっていく

当然3匹は技を出した後なのでそう簡単には動けなかった
そしてそのままでんげきはは3匹に直撃した…

双葉

「よおし！…いつちょあがり！」

3匹はプスプスと煙を出しながら黒焦げになっていた

ミズナ

「うっ、倒せた…？」

そこらへんにあった岩にひっそり身を潜めていたミズナは恐る恐る岩影から顔をだした

双葉

「倒したけど…てかあんた逃げすぎよ！！3VS1ってはっきりいっていじめに過ぎないわよ！！もうちよっとしっかりしな！！」

苛立ちを感じていた双葉はミズナにぶつけた

ミズナ

「うっ、ごめん…ね。本当に僕は臆病で情ないやつだよね…」

双葉の言葉でミズナはぐずぐずと泣き始め、遂には弱言を言い始めてしまうが…

双葉

「ストローップ!!!!!!」

ミズナ

「うひゃああ!?!」

いきなり双葉は顔をミズナにドアップ並みに近付ける。

無論、ミズナは腰が抜けてしまう

双葉

「弱音を吐くん余裕があるならせっせと足つごかせっちゅうねーん
!!!」

双葉の言う通り洞窟入った時と今現在の歩く早さが一段と遅くなっていることが分かる

双葉

「さっ行くよ」

ミズナ

「あっはい…いや、うん」

思わず敬語を使うミズナ

どんなけ未恐ろしいものか…

…

地割れの中最深部

双葉

「…さすが最深部だけあってなかなか暗いね」

ミズナ

「え？なんでここが最深部ってことが分かるの？」

双葉

「よく見てみ、次のフロアにいく階段がないし妙な気配を感じる…」

双葉は深刻な顔をする

双葉

「とりあえず調べてみよか」

ミズナ

「…うん」

二人はキヤタピーを探し始めようと…したとき

「ええええん！怖いよお！」

突然の声

双葉

「あつ！彼処！待って今行くからね！」

双葉が指差した方には芋虫みたくで緑色の体をしているポケモン、
そう二人が探し求めていたキヤタピーだった

双葉はキヤタピーに接近したときであった

キヤタピー

「…!!あ…危ない!!」

キヤタピーが叫んだときにはもう遅かった。何故なら双葉は何者かの攻撃によって吹き飛ばされていたからである
そのまま双葉は壁に激突し、倒れてしまった

ミズナ

「ふ…双葉ああ!!」

ミズナは今にも泣きそうな顔で双葉を助けに走った

ミズナ

「だ…大丈夫なの!？」

双葉

「うん…大丈夫…や」

倒れていた双葉はゆっくりと起き上がりミズナをみた
よく見れば双葉の顔、足、腕から血が出ていた

ミズナ

「双葉…血がでてる…」

双葉

「こんなもの…全然大丈夫だい!それよりも…いつたい誰が…!!」

双葉は疑問に思いながらキャタピールの方向を向く。するとあることに気づいた。

双葉

「（あれは…糸…？）」

双葉が見たもの、それはれっきとした頑丈そうな【糸】であった。
それが蜘蛛の巣状態で張っていた

そして双葉を襲った主が姿を表す

？

「グルルル……………」

ミズナ

「ひ…！」

突然の声にミズナはガックガクに震えていた

双葉

「なるほど…うちを襲った奴…アリアドスやったんね」

アリアドスと呼ばれるポケモンはさらに双葉に攻撃をするためにミサイルばり、複数の針をミサイルのようなに打った

双葉

「ハッ!!」

双葉はそれを華麗によけるがアリアドスは双葉に出来た一瞬の間を狙いまたもやミサイルばりをうち始めた

双葉

「くっ…電気ショック!」

弱い電気が複数の針を打ち落としていくがそれは極一部しか落とせなかった。残りの針は対処できなかつたためそのまま双葉へと向かっていったのであった

双葉

「しまった…!!」

技を出したあとの反動で双葉はミサイルばりをモロくらってしまった

双葉

「ぐう！！！！！」

双葉は少し飛ばされてしまった。ちょうどミズナが岩影に隠れていた場所まで

ミズナ

「双葉…（もうやだよ…もうやだ…怖いよ…）」

ミズナは岩影からでる勇気が無いのか、いっさい出ようとしなかった。

ミズナ

「僕…救助隊…もう無理だよ…双葉…ごめんね…」

一方双葉は

双葉

「あ…ぐう…」

所々で血を出している双葉はもがき苦しんでいた。その光景をアリアドスはメジメジと見ていた。もうあの体では動かないと思う目で見ているアリアドスは次の目標…そう岩影に隠れているミズナを狙おうとしていた

ミズナ

「（怖いよ…帰りたいよ）」

ずっと岩影に隠れているミズナはただ狙われないように息を殺してずっと気づかれないようなことに精一杯だった。しかしその行為は無駄だった。そうアリアドスはミズナが隠れる瞬間に気づいていたのだ

ミズナ

「う…う…怖い…怖いよ」

アリアドスに気付かれているにも関わらずガタガタと震えるミズナ

ミズナ

「なんとか…ならないかな…？…あつそうだ…！」

ここでミズナはある作戦を思い付いた。ミズナが目につけたのは上のフロアに繋がる階段、そうミズナは一度地上に上がり助けを呼ぼうという作戦を思い付いたのだ。しかしこの作戦は非常に危険なものだった。何故ならば上のフロアに繋がる階段まで行くのに必ずアリアドスに見つかってしまうからである。そこまでいくまで隠れる岩影もないのだから。それでもミズナは

ミズナ

「こ…こ…ここは一か八か…あそこの階段を上って地上に行つて助けを呼ぶしかない…3…2…1…えりゃ…！」

一か八かを賭け、ミズナは覚悟を決めて岩影から素早く身を出した。そのまま上のフロアへと全力で走った。このまま上手く行ける…と思っただが

アリアドス

「ブルアアア!!」

アリアドスはミズナが逃げ出そうとした行為を見て、素早くミサイル針をうち始めた

ミズナ

「よしこのまま……っつてっわああああ!!?」

ここから脱け出すという思考が頭一杯だったため敵の攻撃に反応が遅かったミズナ

ミズナ

「(も…もう駄目だ……結局僕なんてただの…ただの腰抜け野郎だね…僕に救助隊なんかもとも無理だったんだ…)」

目から溢れ出す悔しき涙

ミズナは死を覚悟して目を瞑った

ミサイル針がミズナに当たるまで後20cm……10cm……5cmを切ったところでミサイル針はミズナに当たった。何も痛みを感じなかったミズナは疑問に思い、恐る恐る目を開けた。ミズナは完全に目を開けた瞬間目を疑った。本来なら当たるはずのミサイル針が地面に落ちていたのだ

ミズナ

「ど…どっなってんの…？」

双葉

「き…危機一髪だったねミズナ」

そこには倒れていたはずの双葉がヨロヨロと立っていた。すこし苦しそうだが…

双葉

「さっきのお返し…アイアンテール!!」

先程まで苦しそうだった表情の双葉は勇者ある顔にへと一変していた。ギザギザの尾っぽを光らし始めながらアリアドスのもとへ電光

石火しながら近付き、鋼鉄化した尾っぽをアリアドスにぶちまけようとしたのだが……

アリアドス

「グルアアア!!」

なんと、アリアドスは6本あるうち前足の二本の触手を紫色に染め、そのまま片手だけでアイアンテールを止めた。

双葉

「んなっ……………」

驚きを隠せない双葉。素早く後ろに一步下がろうとした双葉だったが、もうすでに遅し、奴は次の攻撃を準備していた。前足の二本を先程より黒紫化しており双葉を切り裂こうとした。その技名は

“クロスポイズン”

災害と困難（後書き）

えゝ報告です

今日から…なるうに戻ったスイツクンです！

まだ鬱である状況ですが…

まあ落ち込んでてもなにも変わらない…

だったらなるうに戻ろう！

ということになりました

…という訳で今までこの小説を楽しんで読んでくれている愛読者様に本当に申し訳ないと思っています

心配かけてすみませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488s/>

ポケモン不思議のダンジョン【日常を変えた救助隊】

2011年10月7日23時58分発行